

# 参加型アートプロジェクトにおける情報発信メディアの特性とアソシエーションの形成過程\*

## A Study on Development Process of the Association and Characteristic of Information Media about Participatory Art Project.\*

田北雅裕\*\*・仲間浩一\*\*\*

Masahiro TAKITA\*\*・Koichi NAKAMA\*\*\*

### 1. はじめに

まちづくりにおいて、市民が主体的・自発的に関わるしくみをつくるのが大きな潮流となっている中で、合意形成手法の在り方やその活動体の運営手法を論じた既往研究が多く見受けられる。計画の対象となる居住環境に対して、興味や関心を広げ深めるために、制度やシステムの側面から様々な方法が議論される一方、まちづくりにおける情報発信メディアの選択や表現技法の及ぼす影響力について、メディアの適性や形成され得るアソシエーションの特性という観点から評価した例は見あたらない。

本研究では、特にまちづくりにおける情報発信手法と、それによって生じる「参加者相互の人間関係や活動の展開」の参考とすべく用件を、アートプロジェクト「RE/MAP プロジェクト(以下、RE/MAP)」という事例を通じて検討するものである。

### 2. まちづくりにおける情報発信メディアの役割

まちづくりという概念について、卯月<sup>1)</sup>は、大規模開発等の物的計画中心であった「都市計画」に対する反対概念として生まれ使われてきたとし、身近な生活環境の整備や街区等小スケールの地区計画、ひいては社会計画をも含めた概念であるとする。また、林<sup>2)</sup>は、住民の語彙としてのまちづくりは「生き生きとしたコミュニティづくり」を目指すものであったとする。このように、まちづくりがコミュニティ形成に関与する社会計画をも鑑みた概念だとすると、その情報発信手段および住民相互のコミュニケーション手段とし

てのメディアの役割も重要であるといえる。例えば、世田谷区役所発行の「街に出る。」は、まちづくりの試みを雑誌とし、街に対する愛着を促すメディアとして機能しているし、地域情報誌の先駆けとして名高い「地域雑誌谷中・根津・千駄木」は、地域文化の発信だけでなく、住民相互のコミュニティ形成に貢献してきたといえる。

本論での情報発信メディアの役割もこれらに沿うものであるが、事例として RE/MAP における情報発信メディアの効果を検証することで、コミュニティの形成、とりわけアソシエーション形成に果たす役割という観点から評価を試みるものである。

### 3. アソシエーションに着目する理由

「アソシエーション」とは、マッキーヴァー<sup>3)</sup>が『社会的存在つまり人間が、何らかの共通の関心事を達成するために作る組織』として提唱した、機能的な社会関係を表す概念である。多様な意味で用いられる「コミュニティ」の概念との関係について、日笠の指摘が示唆的である。

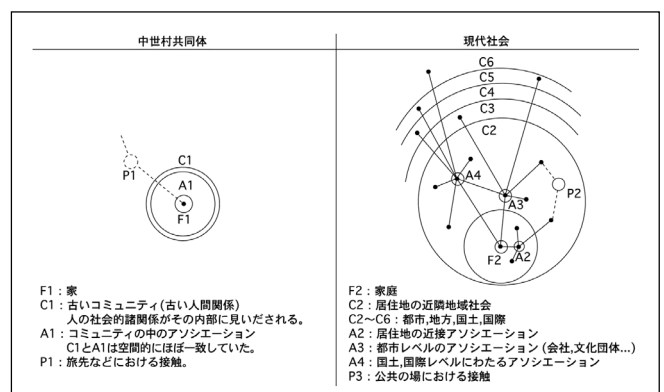


図-1 社会的結合の空間的關係の図<sup>4)</sup>

日笠は、コミュニティとアソシエーションの両概念を用いながら、現代社会においては居住地を基調としないアソシエーションによる新しい人間関係が生じていることを指摘する。また倉沢<sup>5)</sup>は『現代の都市化した社会にあっては、居住地域を基盤としたコミュニティだけでは、人々のコミュニティ的な要求なもの

\*キーワード：まちづくり，アソシエーション

\*\*学生員，芸術工修，九州工業大学大学院工学研究科博士課程

(北九州市戸畑区仙水町1-1, TEL:093-884-3110,

E-mail: info@trivia.gr.jp)

\*\*\*正員，工博，九州工業大学工学部建設社会工学科

(北九州市戸畑区仙水町1-1, TEL:093-884-3110,

E-mail: knakama@tobata.isc.kyutech.ac.jp)

への需要を満たしきれないということ、(中略)(このような考えを)アソシエーションの中にコミュニティを見いだす、あるいはアソシエーションへのコミュニティ性の付与と云ってよい』と指摘する。

本論は、以上の指摘に沿って、現代社会に顕著に見られる「地域的空間の限定を基調としていない社会関係(活動体)=アソシエーション」に着目し、論をすすめるものである。現代社会においてコミュニティ的な要求に応えるためにも、アソシエーション形成の特徴を把握することは必要だといえる。

また、まちづくりにおいて、その活動体を運営する人材が必要とされる場面には多々遭遇する。その際、絶対数として対象地域の「居住者」が少ない場合、居住者以外の人間とのアソシエーション形成のために情報発信手法に工夫が必要となる。そして、新興住宅地に多くみられる、居住地自体に興味がない「居住者」との間にコミュニティを築く場合にも、アソシエーション形成を鑑みた交流、情報発信のための工夫が必要不可欠であると考えられる。

#### 4. RE/MAP とまちづくりとの関係

##### (1) RE/MAP の概要

RE/MAP とは、北九州市在住のアーティスト 3 名と福岡市在住のカルチュラル・スタディーズの研究者 1 名により企画され、「RE/MAP 北九州再地図化計画」として 2001 年 9 月 1 日に北九州市小倉北区にて開始されたプロジェクトであり、その活動体の名称でもある。

以下に本プロジェクトの企画について企画者<sup>6)</sup>が綴ったテキストを抜粋する。『もっとも企画の中心といっても、三人は〈地図〉というコンセプトを軸にした仕掛けを準備したにすぎない。このプロジェクトは、参加者がそれぞれ中心となって自己増殖していくものとして考えられた。企画者はその責任を放棄するわけではないが、そもそもこうしたイベントを行うときにしばしば前提とされている〈中心〉と〈周縁〉という二分法には強く抵抗している。可能なかぎり脱中心化すること。一週間のうちのわずかな時間しか関わっていない人々も決して周縁化されるべきではない。通常の美術展やコンサートのように、アーティ

スト、演者、ミュージシャンと、ギャラリーの観客や聴衆を分離しない。その場に居合わせた人はすべてを可能な限り等しく参加者として扱う、これはプロジェクトの出発点である。』

本論では、RE/MAP のコンセプトを詳細に記述することはしないが、既存のアートプロジェクトおよびカルチュラル・スタディーズに関する学術的な提案として始められた。1 回目の「RE/MAP 北九州再地図化計画」では、空撮により起こされた一般的な「地図」ではなく、心理地図ともいべき参加者それぞれのオリジナルの〈地図〉を収集することを目的とし、一般参加者は企画者らと共にフィールドワークを行い〈地図〉を作製することになった。また会期中は、音楽関連イベント・レクチャー・カンファレンス等他分野に及ぶ催し物を開催し、会期中延べ 400 名近くの参加者を集めた。現在まで、北九州、福岡、ソウル、名古屋、神戸などで計 9 回開催され、コンセプトに共感したアーティスト、建築家、学生らがその都度企画・運営側に回り、当初の企画者に加わる形でプロジェクトを運営する人間は流動的に変化している。

また、上記のように関わる人たちの立場が等しいことが前提となっているため、本論では、関わる人間を便宜上「主要参加者」と「一般参加者」に分けることとした。両者を総じて「参加者」と呼ぶこととする。分け方は(表-1)に示す通りである。

表-1 参加者の分類

主要参加者	レクチャー等の場合はその話し手、エキシビションの場合はアーティスト等、表現・企画・運営側の参加者。
一般参加者	主要参加者が提供する表現に対して関わる参加者。基本的に情報発信メディアによって情報を知る。

##### (2) まちづくりとの関係

まず、RE/MAP およびそれが形成する社会関係は居住地に限定されないアソシエーションである。その点からアソシエーション形成の参考となるべく要件を、現代のまちづくりに援用できる可能性がある。また、今回は分析まで及ばないが、RE/MAP は、アソシエーションでありながら、プロジェクト毎にその地域

表-2 「RE/MAP 北天神」の概要

2003年5月1日～6月1日		RE/MAP 北天神 場所：福岡県立美術館（福岡県福岡市）
レクチャー・カンファレンス・フィールドワーク・資料展示・ウェブプロジェクト		
福岡県立美術館の企画展「アートの現場 vol.6」に RE/MAP プロジェクトとして参加。一般参加者を交えたフィールドワーク、カンファレンス等を実施。ウェブ上では「連載的批評」というコンテンツと北天神の噂や情報を募集する掲示板を設置した。		
主催	福岡県立美術館	
情報発信メディア	ウェブサイト・フライヤー・地域情報誌・Eメール・電話	

表-3 RE/MAP が掲載された書物

(a)「現代思想 5」 特集 公共圏の発見 2002, vol.30-6, 青土社
(b)「10+1」 特集 都市集住スタディ 2002, No.26, INAX出版
(c)「あいだ 77号」 2002,「あいだの会」発行
(d)田島則行, 久野紀光, 納村信之編「都市/建築 フィールドワークメソッド」 2002, INAX出版
(e)「BT 美術手帖」 vol.54 No.822, 2002
(f)上野俊哉, 毛利嘉孝「実践カルチュラル・スタディーズ」 2002, 筑摩書房
(g)「今芸術 ART TODAY」 2002
(h) Howard Chan「Re-mapping Hong Kong」 Alternatives: Contemporary Art Spaces in Asia (The Japan Foundation Asia center,2002)
(i)「ideal Architecture」 01 No.125, 2003

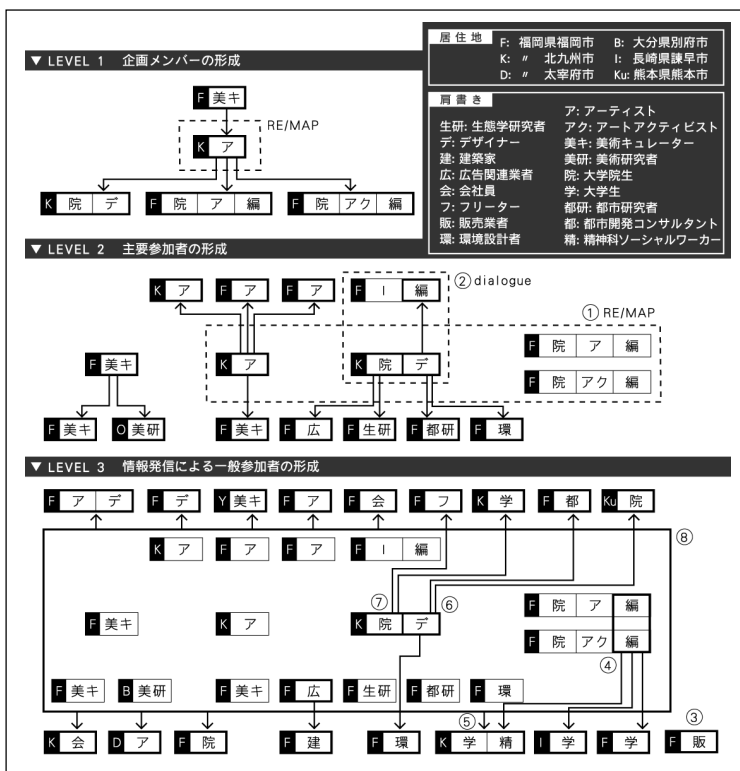


図-2 「RE/MAP 北天神」におけるアソシエーションの形成過程

のフィールドワークを行い、地域との関連を連想させる〈地図〉をテーマに活動をしている。これは、そもそも地域への愛着を持ち得ていないアソシエーションが愛着を持ち得ていくプロセスの分析の対象となるだろう。

## 5. 「RE/MAP 北天神」における情報発信手法とアソシエーション形成の特徴

今回は、過去9回のRE/MAPの中から2003年5月1日～6月1日に福岡県立美術館にて開催された「RE/MAP 北天神」におけるアソシエーションの形成過程と情報発信メディアの特性を詳細に見ることとする。

### (1) RE/MAP 北天神の概要

「RE/MAP 北天神」では県立美術館にて1ヶ月間にフィールドワーク等4つのイベントと常設資料展

示、そしてウェブサイト (<http://remap.jp>) 上で「北天神地区について噂や情報を教えてください」という名目の掲示板を設置し、「連載的批評」という企画も行った。そして広報のための情報発信メディアは、ウェブサイト、フライヤー(チラシ)、福岡市の地域情報誌、Eメール、電話を用い、会期中延べ200人程の来場があった(表-2)。

一般参加者は、RE/MAPに興味のある者、北天神地区に興味のある者、RE/MAPの主要参加者に興味のある者等様々であった。次にアソシエーション形成過程を詳細に見る。

### (2) アソシエーションの形成過程

#### (a) LEVEL 1: 企画メンバーの形成

先に述べたようにRE/MAPの企画チームのメンバ

一は流動的に変化する。今回も例にもれず、まず主催者の [F・美キ] (福岡市居住の美術キュレーターという意。凡例は図 2。以下同様) が RE/MAP の企画中心人物である [K・ア] に声をかけた。そして日頃から親交があり、過去にも RE/MAP に参加経験のある 3 人に声をかけ、今回の企画メンバーが形成された。

### (b) LEVEL2: 主要参加者の形成

LEVEL 1 で RE/MAP となった [K・ア] [K・院/デ] [F・院/ア/編] [F・院/アク/編] (①)らが今回の企画を検討し、開催するイベントにあわせて、必要な人材を収集することになった。その際、[K・院/デ] は、仕事仲間である [F・I/編] を誘い、「dialogue」という題名のカンファレンスイベントを開催することになった。「dialogue」は RE/MAP に関わらず今後も継続していくイベントとして、また 2 人のユニット名として位置づけられた。

### (c) LEVEL3: 情報発信による一般参加者の形成

アンケートおよびインタビュー調査で回答が得られた 18 名の「一般参加者」と「主要参加者」16 名についてのアソシエーションの形成過程である。まず、関わるきっかけとなったメディアがはっきりしなかったのは [F・ア/デ] [F・デ] [F・ア] [K・会] である。「いろいろなところで知った」という回答だった。矢印が書かれていない [F・販] は美術館にたまたま来場したことによる参加だった(③)。主要参加者であり企画メンバーでもある [F・院/ア/編] [F・院/アク/編] は 2 人で美術批評誌を発行している。それに掲載されていた RE/MAP に関する情報を見て来場した一般参加者が 3 名いた(④)。特に(⑤)の参加者は、他の雑誌による RE/MAP の批評を読んだことがあり、それがきっかけだったとも言う(表-3 の(b))。また、同じく企画メンバーである [K・院/デ] は RE/MAP のウェブサイトだけでなく、個人でもウェブサイトを運営している。そのサイトを観て参加した一般参加者が 2 名いた(⑥)。**[K・院/デ]** にかんしては、その他に在学している大学のサイトの掲示板への書き込みで個人的に広報していた。それを観て来場したのが、[F・フ] [K・学] である(⑦)。その他 (⑧)の□から矢印が伸びている参加者は、RE/MAP のウェブサイト、フライヤーで情報を知ったことによる来場であった。

## 6. 考察とまとめ

### -アソシエーション形成に寄与した要素-

#### (1) 肩書きを 2 つ以上持つ主要参加者の存在

肩書きで数えると一般参加者も含め、17 種類もの参加者が集まった。この要因の 1 つに 1 人で肩書きを 2 つ以上持つ主要参加者の存在が考えられる。特に多くの嗜好を持つ参加者を募る場合、企画の段階でその受け口となる人物を用意しておくことが効果的であると推測できる。

#### (2) 主要参加者が有する情報発信メディアの多様性

一般参加者が参加したきっかけに、RE/MAP として用意していないメディアによるものが見られた。それは、主要参加者が有する情報発信メディアであった。結果的に総体としてメディアの種類が多様でかつ多数となり、広報としての機能が果たされ、より多くの人数および肩書きの参加者を募ることが可能であったと考えられる。

#### (3) フライヤーというメディアの存在

フライヤーの学究的な定義は、管見によると見当たらない。しかし、音楽イベントやアートイベントでは若者の間で一般的に使用されている言葉である。主催者の嗜好の合う店や場所に置かせてもらうチラシを総じてこう呼ぶ。地域情報誌による来場者がいないのにも関わらず、フライヤーを見て参加した者が数人いたことから、配布時に嗜好を限定させているという意味において、効率的にアソシエーションを形成させるメディアとして機能している可能性も考えられる。

### 【 引用文献 】

- 1) 卯月盛夫著「「参加のまちづくり」の目指すもの」  
「造景」、建築資料研究社、1997、p42
- 2) 林泰義著「まちづくりとコミュニティ」  
日本建築学会編「建築雑誌 10」、技報堂、2000、p26
- 3) R.M.マッキーヴァー著「コミュニティ」、ミネルヴァ書房、1988
- 4) 日笠端著「市町村の都市計画 1『コミュニティの空間計画』」、共立出版株式会社、1997、p20
- 5) 倉沢進著「コミュニティ論～地域社会と住民活動～」、放送大学教育振興会、1998、p153
- 6) 「10+1 No.26 特集 都市集住スタディ」、INAX 出版、2002、p173